様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　５ 月 ２０ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０２１５３

研究課題名（和文）「現実」概念の現象学的・媒介論的再定義――現象学・近代日本哲学・意識の科学

研究課題名（英文）Phenomenological and Mediational Redefinition of the Concept of "Reality": Phenomenology, Modern Japanese Philosophy, and the Science of Consciousness

研究代表者
田口　茂（TAGUCHI, Shigeru）

北海道大学・文学研究院・教授

研究者番号：５０２８７９５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：第一に、現象学的観点から見た「現実の手応え」とも言える明証論を追究し、現実を自然に生きる態度と、それについての「超越論的な気づき」との間の密接な関係を明らかにした。第二に、田辺元の「媒介」概念の研究により、現象学を媒介論的に展開するアイデアを複数の論文等で発表した。第三に、神経科学者、数学者、認知科学者との共同研究により、「意識」の学際的研究を推し進め、量子論とも整合的で、数学の「圏論」のアイデアを採り入れた新しい現実観を書籍等で提示することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
現象学は近年主観主義的な哲学として批判されることが多いが、その射程は本来、客観的・物理的なものまでを含めた一切の現象に及ぶ。その哲学的射程をよりクリアにするために、本研究では田辺元の「媒介」の概念を補助線に用い、現象学が本来もつ「現実論」としての意義を明らかにした。これにより、諸科学との様々な交流が可能になる。その可能性を実際に示すために、本研究では、数学者・神経科学者・認知科学者などと共同研究を行い、共著論文・共著書を出版することにより、新しい現実観を提示することができた。

研究成果の概要（英文）：First, I examined Husserl's phenomenological theory of 'evidence,' which can be understood as a phenomenological concept of "the touch of reality." This allowed me to uncover the close relationship between the natural attitude of experiencing reality and its "transcendental awareness." Second, I published several articles on the idea of developing phenomenology on the basis of Hajime Tanabe's concept of "mediation." Third, through joint research with neuroscientists, mathematicians, and cognitive scientists, I conducted interdisciplinary research on consciousness and presented in a book and in other publications a new view of reality that is consistent with quantum physics and incorporates ideas from "category theory" in mathematics.

研究分野：哲学（特に現象学、近代日本哲学、意識の哲学）

キーワード：現象学　日本哲学　媒介　数学　量子論　田辺元　フッサール　意識

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

現代において、「現実とは何か」という問いに対する答えは、科学においてさえ必ずしも自明なものではなくなりつつある。その背景には、たとえば量子力学の発展があるが、近年における「意識の科学的研究」（scientific study of consciousness）の急速な進展も、「現実」への新たな問いを促している。とりわけ 1990 年代以降、神経機構の物理的解明ならびに意識と神経との相関（NCC）の研究が進展するにつれ、D. Chalmers によって「ハードプロブレム」と呼ばれたような、主観的・現象的に経験される「クオリア」的な意識への問いが先鋭化されつつある。物質を基本的実在とする世界観に立脚するかぎり、「現象」としての意識が一体どのような意味での現実であるのかは、大きな謎とならざるをえない。この問題に対し、「統合情報理論」（IIT）や「グローバルワークスペース理論」など様々な意識理論が提唱される一方で、現実の「汎心論」的解釈を導入しようとする人々（D. Chalmers, Ch. Koch, G. Strawson など）と、それに懐疑的な人々が論争を展開するなど、議論は混沌とした状況にある。ここにおいて科学は、「意識」という独特の現象に挑戦することを通して、科学自身の内包する現実観そのものを再吟味し、場合によっては解体・再構築せざるをえない状況に追い込まれているのである。

研究代表者は、2011 年から、Piet Hut プリンストン高等研究所教授（物理学、学際研究）および西郷甲矢人・長浜バイオ大学准教授（数学）との共同研究を通じて、現象学的な「現実」概念を科学的な批判的観点から吟味する研究を行ってきたが、その過程で、現象学的な「現実」概念の中に、科学の核心にも暗黙のうちに生かされている重要な洞察を見出すとともに、科学者との対話を阻害するような観念論的な偏向をも意識するようになった。本研究に先立つ数年間に、神経科学者の土谷尚嗣・モナシュ大学准教授との共同研究（Tsuchiya, Taguchi & Saigo 2016）をはじめ、神経科学者・認知科学者（金井良太（株式会社アラヤ）、山田真希子（量子科学技術研究開発機構）、吉田正俊（生理学研究所［当時、現・北海道大学］）、Tom Froese（メキシコ国立自治大学［当時、現・沖縄科学技術大学院大学］）の各氏など）との学術上の交流を通じて、現象学的な「現実」概念が科学的現実観の進展にも資すると確信すると共に、現象学的な「現実」概念と「意識」概念の修正・改鋳の必要性をますます強く認識するに至った。

他方、研究代表者は、現象学研究と結びつけながら、西田幾多郎、田辺元らによる近代日本哲学の研究を進めてきたが、西田・田辺におけるとりわけ「媒介」論的な思考が、現象学的な「現実」概念を現代的な仕方で改鋳していくために有効な視座となりうることに気づいた。西田・田辺は、物理学や生物学、数学などの同時代的な進展や、マルクス主義の唯物論などに敏感に反応しつつ、「現実とは何か」をめぐって徹底した思惟を展開している。その中で彼らは、「意識」概念の閉鎖性を克服するために、内と外、主体と環境との「媒介」そのものに定位するような思考を深めている。こうした思考法は、現象学的「意識」概念や「現実」概念の観念論的な偏向を克服し、現代の諸科学、とりわけ意識科学との対話を可能にするために、重要な寄与を果たしうると考えられる。

研究代表者はすでに、科学研究費補助金・基盤研究（C）「現象学の媒介論的展開──フッサールと田辺元の哲学を手引きとして──」（平成 25～27 年度）において、フッサールと田辺・西田の思考を、「媒介」をキーワードとして結びつける試みを行ってきた。これにより、現象学的な「意識」概念や「経験」概念、ならびに「内在-超越」関係の非観念論的・媒介論的解釈などを進め、一定の成果を得た。これらの研究により、現象学的「現実」概念を根本的に再考し、「現実」をめぐる現代の論争に接続する準備が整った。本研究では、これを土台として、意識の科学的研究や、関連する哲学上の議論を参照しつつ、現代における「現実」観の転換に寄与しうるような「現実」概念の再定義を試みた。

２．研究の目的

(1) 「明証」概念の媒介論的再解釈

第一に、現象学的「現実」概念を現象学的たらしめている基本的な拠り所が「明証」（Evidenz）の概念にあることをあらためて明確化した上で、「明証」概念の媒介論的再解釈を行う。まず、研究代表者がこれまで積み重ねてきた、フッサールにおける現象学的「明証」概念の研究に立脚し、およそ何かを「確か」であると認める働きの根底にある事態を明確化する。フッサールはそれを「明証」と呼ぶのであるが、フッサールにおいては、それに関するある種の主観的・観念論的解釈によって、この概念がもつポテンシャルが十分に生かされていないと考えられる。フッサールの言う「現象学的還元」は、「明証への還帰」として解釈できるため（Taguchi 2013）、「明証」概念を主観主義的解釈から解放するなら、現象学的分析全体が非観念論的な仕方で再解釈されうる。研究代表者は、その鍵の一つが田辺元の「媒介」概念や、西田幾多郎の「経験」解釈にあると考える。明証そのものを「媒介」と捉えることにより、それを「内」にも「外」にも位置づけない思考が可能になる。本研究では、この発想をさらに徹底して追求し、フッサール現象学の諸概念の読み替えを図る。

(2) 意識の科学から物質的・非物質的現実の媒介関係へ

第二に、意識の科学や心の哲学において用いられている「現実」概念が、多くの場合「物質」を基本的実在とする前提に立脚している点を取り上げ、この前提そのもののステイタスを明証論的に分析し吟味する。この分析により、物質主義的な前提がさらにより根底的な前提──もはや物質に拠らない前提──に立脚している点が明示されうる。その前提とは、第一に数学をはじめとする「イデア的」現実であり、第二に主観的な「体験」の現実である。①科学的客観性を基礎づけている数学はそれ自体物質ではない。非物質的だが、現実の現実性を形作る重要な一契機である。この「イデア的なもの」の現実性は、現象学の重要な主張の一つであるが、フッサールにおいては、このイデア性が物質的実在性と十分に媒介されていないように見える。ここでも、西田・田辺的な「媒介」の思想が生かされうる。②主観的な「体験」的現実は、ある種の事実性として、一切の「測定」の根底にあり、それを通じて科学的客観性の根底にある。この点を、フッサールならびに西田に即して明示する。これにより、物質的現実を硬直した思考の枠組みから解放し、物質的現実と非物質的現実との媒介関係の分析に踏み込むことが可能となる。これらの考察は、最終的に「時間性」の現象学的分析に帰着することになる。

(3) 科学的知見と調和しうる「現実」概念の定式化

第三に、神経科学者や認知科学者、物理学者からの批判的フィードバックを受けつつ、現代の科学的研究の成果とも調和しうる「現実」概念の定式化を図る。具体的には、しばしば主観主義的・観念論的色調をもった現象学の用語・表現法を修正し、現代の科学的意識論にも活用されうるような「現実」の捉え方を提案する。その際、非主観主義的であると同時に、単に物理主義的でなくある種の経験に立脚した西田・田辺の概念構成を参照する。西田・田辺においては、現象学以上に、実体論的な思考の脱却が図られており、この点で、量子力学や意識研究において現代科学に求められている要請に適合している面がある。このような方向性において、「対象」的なものを実体的な拠り所としない「現実」の語り方を工夫し、提起する。

３．研究の方法

(1) 現象学と日本哲学の相互媒介による「明証」概念の再解釈

まず第一に、「明証」概念の媒介論的再解釈を行った。①研究代表者は、これまでの研究において、フッサールの「明証」概念の検討を進めてきた。その成果を基盤として、フッサールの「明証」概念の特性をまとめ直した。『現象学の理念』、『イデーン I』、『形式的論理学と超越論的論理学』に加え、未公開草稿（Ms. A I 31 など）を再検討し、E. Fink, J. N. Mohanty, G. Heffernan, D. Føllesdal らの解釈を参照して、フッサールの明証論の基本構想を明確化する作業を行った。②次いで、フッサール現象学におけるこの概念の位置づけの不明確さを問題化した上で、この点の解消を図った。明証概念は、真理の客観性と真理体験の主観性との間で、必ずしも明確な位置づけをもたない。この点を、フッサール現象学のみによって明確化していくことは困難である。そこで、西田幾多郎の「経験」概念および田辺元の「媒介」概念を参照しつつ、フッサール現象学において主観的とも客観的とも位置づけられない「明証」の独特の性格を、かえってその積極的な特性として明示することを試みた。その際、初期西田の「純粋経験」論（『善の研究』および関連の断章）、後期の「行為的直観」および「歴史的実在」論、中期田辺の「種の論理」における「媒介」論、後期田辺、とりわけ『懺悔道としての哲学』および『数理の歴史主義展開』における「媒介」および「転換媒介」の概念などを扱った。

(2) 意識の科学における「現実」概念の分析

第二に、これと平行して、「意識の科学」に関連する諸文献を検討することによって、そこで前提されている「現実」概念の分析を進めた。D. Chalmers, J. Searle, D. Dennett, N. Block といった哲学者たちの基本文献を検討したほか、Ch. Koch, A. Damasio らの神経科学者の著作、G.Tononi の統合情報理論（integrated information theory）に含まれる現実観、K. Friston の「自由エネルギー原理」（free energy principle）に含まれる現実観（これに関連して、A. Clark, J. Hohwy らの predictive brain という考え方）などを検討した。こうした検討を通じて、国際意識科学会（ASSC）などを中心に展開されている「意識の科学的研究」において、多くの論者が前提している「現実」概念の特性を分析した。「統合情報理論」や「自由エネルギー原理」にもとづく意識論には、現象学と通じる点もあるため、その異同が問題となる。また、これらの研究においては、数学が重要な役割を果たしているが、数学的なものが彼らの現実観においてどのような位置づけをもっているのかについても、検討する必要があった。この研究は、神経科学者から、適宜アドバイスを受けつつ進めた。

次いで、「意識の科学」において前提されている「現実」概念を現象学的・明証論的に吟味した。物理的なものは、現象学的経験から切り離しては与えられえない。しかしそれは、単に客観的なものを主観的なものに帰着させるということではない。「明証」概念の媒介論的再解釈（上記(1)の研究）を参照しつつ、科学的物質観の根底に、単に主観的でも客観的でもなく、両方面の「媒介」そのものであるような現象（明証）があるということが示せれば、科学的物質観を単純に否定することなく、科学的物質観と主観的意識経験との断絶を克服する可能性が開けてくる。

(3) イデア的なものと測定の基礎の媒介論的考察

上記の研究は、二つの点で、現象学の基本思想の明確化を要求している。①第一に、科学的物質観と不可分に結び付いている「数学」への信頼は、非物質的なイデア的（理念的）なものへの信頼とも言うことができる。この信頼がどのような性質のものであるかについては、科学研究の中ではほとんど論じられていない。現象学は、イデア的なものが現実の基本的な所与性であることを早くから主張してきたが（フッサール『論理学研究』第一巻「プロレゴメナ」参照）、この主張は、科学者をも説得しうる普遍的な明晰さにもたらされる必要がある。そのため、「明証」概念の媒介論的再解釈を援用しつつ、また田辺元の媒介思想を参照しながら、イデア的なものの媒介論的再解釈を進めた。②第二に、いかなる客観的「測定」の根底にも、経験的に「確かめる」という明証の働きがあるが、「現実」観に関わるその意義を、フッサールならびに西田を参照しつつ明確化した。

(4) 科学者との対話による批判的検証と、「現実」概念の再定式化

以上の研究の成果を、科学者との対話を通して検証し、科学者（とりわけ意識研究を行う科学者）にもある程度共有されうるような普遍的なレベルへと高めることを試みた。数学者、神経科学者、認知科学者との対話、ワークショップ、共著論文執筆等を通して、上記の「現実」観についてのレスポンスを受け取り、批判的に吟味・修正を行った。

以上の研究成果を総合して、現代科学が「意識」の問題をめぐって逢着している課題に示唆を与えうるような形で、「現実」概念の再定式化を行った。事態を紛糾させているのは、物理的客観性と主観的意識現象の所与性という異なるタイプの自明性である。この自明性を解きほぐし、それらの媒介を明らかにする仕方で、上記の再定式化を行った。

４．研究成果

2017 年度は、第一に、現象学的「明証」概念の特性を再吟味した。『論理学研究』以来のフッサールの「明証」概念が、実質的にはすでに媒介論的な解釈を許す特性をもっているにもかかわらず、それを表現する言葉は、媒介論的な方向へ徹底していないことをあらためて確認することができた。その上で、とりわけ明証のトリアーデ（必当然的明証、十全的明証、推定的明証という三つの種類の明証の相互媒介）を、経験と現実の一般原理へと拡張することを試みた。その際、田辺元の「種の論理」をはじめとする媒介思想、C. S. パースの現象学などが参考になった。以上の研究成果が、その後の研究の基盤となった。

第二に、「意識の科学」に関連するテキスト、とりわけ神経科学の論文を参照することにより、科学的・経験的研究と、「主観的」とも言われる現象学的研究とを相互媒介的に噛み合わせるための準備を行った。これは、「現実」そのものの媒介論的解釈の核心を成す研究の一つとなるはずである。2017 年度はとりわけ、K. Friston や A. Seth による「能動的推論」と「エナクティヴィズム」の導入、そしてそれによって「予測符号化」の考え方にどのような変化がもたらされるのか、という点を検討した。その際、研究協力者の吉田正俊氏（神経科学）との議論から重要な示唆を受けた。また、フッサールの『経験と判断』における議論が、予測符号化理論と統合情報理論（近年、意識の神経科学において盛んに論じられている二つの有力な理論）を結びつけるために生かされうる可能性があるということを見出した。

第三に、「現実」概念の根本的な現象学的特性を明らかにするために、西郷甲矢人氏（数学）との共同研究により、量子力学における現実解釈、数学における圏論の意義などを検討した。その成果は出版を準備している共著書のための原稿にまとめた。

2018 年度は、吉田正俊氏との共同研究により、K. Friston のいう自由エネルギー原理と視覚的意識との関係を考察し、そこに現象学的な観点を導入する試みを行った。その成果は『神経回路学会誌』に論文として発表した。

次に、前年度の研究成果をもとにして、「意識の科学」において前提されている「現実」概念を現象学的・明証論的に吟味する研究を行った。フッサール現象学の根本的性格をあらためて吟味し、現象学の超越論的性格と現象学の自然化という一見相反する二つの方向性が、実際には具体的な現象学的研究において一つに重なる可能性を見出すことができた。その可能性は、「現象学を行う主体」についての新たな解釈を伴う。この考察により、以前から研究してきたフッサールの「原自我」概念に関して、新たな解釈を生み出すことができた。すなわち、これを「一人称」にさえ先立つ「ゼロ人称」の主体として理解する解釈である。この解釈は、その後の研究に大きく寄与するものとなった。この成果は、最終的には 2019 年に研究論文にまとめ国際的学術誌 *Metodo* に発表した。

また、科学的な世界観のなかにいかにして主観性や意識を位置づけるかという問題に関して、Tom Froese 氏（認知科学）との共同研究を進め、「自然」という形での現実観そのものを根本的に問い直す仕方で、上記の問いにアプローチした。そこでは、自然が根底的に非決定論的であること、量子現象に見られるミクロレベルでの非決定性と、決定論的に見えるマクロレベルの現象、そしてやはり非決定論的に見える生命現象や意識現象との関係を、自然の中にある決定性を相殺する動きから論じた。この成果は国際的学術誌 *Philosophies* に投稿し、2019 年 4 月に出版され

た。
　上記の研究に関連して、科学における数学の役割、そのイデア的性格と経験的現実との関係について、西郷甲矢人氏（数学）との共同研究により、現象学的観点と数学的・物理学的観点を密接に関連づける仕方での研究を継続した。この共同研究の成果をまとめた書籍の執筆を 2018 年度中にほぼ終えることができた。
　このように、2018 年度は科学者との共同研究が多くの面で本格的に進展し、その成果はいずれも現象学の媒介論的解釈に大きく寄与した。

　2019 年度は、第一に、現象学的「明証」論の媒介論的解釈をさらに深めると同時に、現象学と日本哲学との相互媒介の可能性を多面的に追究した。Nicolas de Warren 氏（現象学）との共同編集により、日本哲学との交差領域の研究も含む日本の新しい現象学研究を紹介する英語論文集 *New Phenomenological Studies in Japan* (Springer)を出版することができた。
　第二に、田辺元の「媒介」概念の研究により、現象学を媒介論的に展開するアイデアを複数の論文等で発表した。現象学はしばしば「主観的」な経験の学と見なされてきたが、主観的であれ客観的であれおよそ一切の「現象」を問題とし、「現象」という切り口から一切の問題にアプローチしていく現象学は、単に「主観的」と特徴づけることはできない。むしろ現象学が明らかにするのは現象間の「媒介」であると理解すると、その哲学としての特性や強みをより適切に理解することができる。こうした観点から、複数の招待発表のほか、査読付き英語論文の形で媒介論的現象学の可能性について成果を発表した。また、Andrea Altobrando 氏（現象学）との共同編集により、日本哲学と現象学の交差そのものをテーマとする英語論文集 *Tetsugaku Companion to Phenomenology and Japanese Philosophy* (Springer)を出版した。
　第三に、神経科学者・数学者・認知科学者との共同研究により、「意識」の学際的研究を推し進めたほか、さらに「現実」一般の捉え方について、新しい観点を提示することができた。先に言及したように、2019 年 4 月に認知科学研究者 Tom Froese 氏とともに AI・ロボティクス分野の新しい可能性を自然の捉え方の転換とともに論じた査読付き英語論文を発表し、AI 研究者野口渉氏、飯塚博幸氏らと現象学的発想を採り入れた AI エージェントによるシミュレーション実験（学会プロシーディングスに発表）を行ったほか、数学者西郷甲矢人氏と長年にわたり行ってきた共同研究の成果として、数学における圏論と現象学にもとづいて「現実」観そのものの転換の必要性を提起した著書『〈現実〉とは何か――数学・哲学から始まる世界像の転換』（筑摩書房）を世に問うことができた。

　2019 年度の最後の数ヶ月は、新型コロナウイルスの感染状況の拡大により、出張等がとりやめになったため、直接経費の一部を 2020 年度に繰り越した。2020 年度は、前年度までの研究を基盤としつつ、研究を継続した。前年度に引き続き、現象学的思考の再構築を通して、「意識」を現実のなかにどう位置づけたらよいか、それによって「現実」そのものの見方・捉え方がどのように変容するかについて考察した。現象学、ならびに近代日本哲学（西田幾多郎・田辺元）の思考を参照して考察を深めるだけでなく、神経科学者・数学者・認知科学者・ロボット研究者らとの共同研究を通して、現代の科学的思考とも適合性が高く、哲学的にも自然な現実観の彫琢を進めた。
　2020 度はとりわけ、西郷甲矢人氏との共同研究を通して数学における圏論的思考が、現象学的現実観の変容と彫琢にも大きな寄与を果たしうる点を明らかにし、共著論文として発表した。そこでは一つのケーススタディとして、自己と他者の関係を圏論的に表現することを試みた。「スライス圏」の構造を援用することにより、一見謎めいて見える自他関係のモナド論的構造を明確に描き出すことが可能となったほか、フッサールにおける「原自我」の概念にも新たな解釈をもたらすことができた。
　また、大塚淳氏、西郷甲矢人氏との共同研究により、現象学的明証論の観点から、統計学に一つの哲学的解釈をもたらすことを試みた。そこでは、「真なる分布」として言及されるものの微妙な意義が明らかにされ、それを通して逆に、現象学における「十全的明証」の意義について新たな解釈を提示することが可能となった。そこでは、〈決して取り押さえられないにもかかわらず、それなしには知や経験のプロセスが始まらないような次元〉に新たな光を当てることができた。
　さらに 2020 度は、以前から活動を続けてきた田辺哲学の研究グループ（田辺哲学シンポジウム）から、田辺哲学研究の現時点での到達点を示す論文集を編纂し、上梓することができた。

　以上の研究を通じて、明証論の再解釈を基盤とした現象学の媒介論的再解釈が、「現実」概念の一定の変容を可能にし、それにもとづいて、現象学的な経験と現象の分析と、現実に対する数学的・科学的なアプローチとを相互に噛み合わせる仕方を、実際的な可能性として示すことができたのではないかと思われる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　7件）

１．著者名 田口 茂，大塚 淳，西郷 甲矢人	４．巻 47
２．論文標題 現象学的明証論と統計学――経験の基本的構造を求めて	５．発行年 2020年
３．雑誌名 哲学論叢	６．最初と最後の頁 20-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 田口茂; 西郷甲矢人	４．巻 48-9
２．論文標題 圏論による現象学の深化――射の一元論・モナドロジー・自己	５．発行年 2020年
３．雑誌名 現代思想	６．最初と最後の頁 202-214
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Taguchi, Shigeru	４．巻 7
２．論文標題 Mediation-based phenomenology: Neither subjective nor objective	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Metodo. International Studies in Phenomenology and Philosophy	６．最初と最後の頁 17～44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19079/metodo.7.2.17	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Taguchi, Shigeru	４．巻 s1.3
２．論文標題 Extreme obviousness and the "zero-person" perspective: Why is the problem of the "primal I" fundamental for transcendental phenomenology?	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Metodo. International Studies in Phenomenology and Philosophy	６．最初と最後の頁 15～37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19079/metodo.s1.3.15	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 田口 茂	4．巻 62
2．論文標題 ベイズ理論から帰結する現実観の変容	5．発行年 2019年
3．雑誌名 心理学評論	6．最初と最後の頁 16～24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24602/sjpr.62.1_16	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Froese, Tom; Taguchi, Shigeru	4．巻 4
2．論文標題 The Problem of Meaning in AI and Robotics: Still with Us after All These Years	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Philosophies	6．最初と最後の頁 14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3390/philosophies4020014	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Noguchi, Wataru; Iizuka, Hiroyuki; Taguchi, Shigeru; Yamamoto, Masahito	4．巻 2019
2．論文標題 Spatial Representation of Self and Other by Superposition Neural Network Model	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Proceedings of the Artificial Life Conference 2019	6．最初と最後の頁 531-532
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1162/isal_a_00216	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 吉田正俊，田口茂	4．巻 25(3)
2．論文標題 自由エネルギー原理と視覚的意識	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本神経回路学会誌	6．最初と最後の頁 53-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3902/jnns.25.53	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 田口　茂	4．巻 1123
2．論文標題 田辺元――媒介の哲学　第五章「死の哲学」とリアリティの核心	5．発行年 2017年
3．雑誌名 思想	6．最初と最後の頁 96-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田口　茂	4．巻 14
2．論文標題 閉じた個という不合理――フッサールと西田における他性の謎	5．発行年 2017年
3．雑誌名 西田哲学会年報	6．最初と最後の頁 34-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計14件（うち招待講演　10件／うち国際学会　8件）

1．発表者名 Taguchi, Shigeru
2．発表標題 Mediation-based phenomenology: Neither subjective nor objective
3．学会等名 第24回中国現象学会年会（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 Taguchi, Shigeru
2．発表標題 Extreme Obviousness and the ‘Zero-Person’ Perspective
3．学会等名 Self and Obviousness (at China University of Political Science and Law)（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 Taguchi, Shigeru
２．発表標題 The Mediating Nature of the Given: A Phenomenology of the Triadic Evidence
３．学会等名 Demystifying the Given (at China University of Political Science and Law)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yoshida, Masatoshi; Taguchi, Shigeru
２．発表標題 Free energy principle and visual consciousness
３．学会等名 2019 年度 生理学研究所研究会 「認知神経科学の先端 脳の理論から身体・世界へ」
４．発表年 2019年

１．発表者名 Taguchi, Shigeru
２．発表標題 Mediation-based Approach to Evidence: Husserl and Beyond
３．学会等名 The 4th Annual Conference of the East Asian Network for Phenomenology（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Shigeru Taguchi
２．発表標題 From Ontology to Mediology: Toward a new understanding of consciousness
３．学会等名 Consciousness Reseach Network meeting 2019（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Shigeru Taguchi
２．発表標題 Self as Mediation: Husserl and Tanabe on basic states of self
３．学会等名 Dogen in Dialogue with Analytic Philosophy（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 田口　茂
２．発表標題 自他の重なり合い――間主観性の基本様態をめぐる学際的研究
３．学会等名 「アイデンティティの内的多元性」プロジェクト第1回ワークショップ
４．発表年 2018年

１．発表者名 田口茂、小川健二、竹澤正哲
２．発表標題 自己意識と他者意識の共通の源泉？ ――現象学と認知神経科学の学際的研究
３．学会等名 公開シンポジウム｜自己をめぐる冒険：現象学・ロボティクス・神経科学・精神医学の境界を超えて
４．発表年 2019年

１．発表者名 Shigeru Taguchi
２．発表標題 Is Self Necessary for Consciousness?
３．学会等名 生理研研究会2017 認知神経科学の先端 「意識の脳内メカニズム」（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 田口　茂
２．発表標題 〈差異〉によって〈同じさ〉を定義する――現象学的考察
３．学会等名 日本認知科学会第34回大会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 田口　茂
２．発表標題 田辺元の「媒介」概念とそのポテンシャル
３．学会等名 第五回日中哲学フォーラム（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 田口　茂
２．発表標題 田辺元における「種の論理」の展開と媒介論の深化
３．学会等名 第五回田辺哲学シンポジウム
４．発表年 2017年

１．発表者名 Shigeru Taguchi
２．発表標題 Self as Mediation: Hajime Tanabe’s Philosophy of Self and Its Implications
３．学会等名 International Workshop "Self and Paradox in Dogen and Tanabe" (the 172nd Phileth Seminar)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計9件

1．著者名 杉村　靖彦、田口　茂、竹花　洋佑	4．発行年 2021年
2．出版社 晃洋書房	5．総ページ数 388
3．書名 渦動する象徴	

1．著者名 Taguchi, Shigeru; Altobrando, Andrea	4．発行年 2020年
2．出版社 Springer	5．総ページ数 262
3．書名 Tetsugaku Companion to Phenomenology and Japanese Philosophy	

1．著者名 西郷　甲矢人、田口　茂	4．発行年 2019年
2．出版社 筑摩書房	5．総ページ数 272
3．書名 〈現実〉とは何か――数学・哲学から始まる世界像の転換	

1．著者名 de Warren, Nicolas; Taguchi, Shigeru	4．発行年 2019年
2．出版社 Springer	5．総ページ数 184
3．書名 New Phenomenological Studies in Japan	

１．著者名 Altobrando, A.; Niikawa, T.; Stone, R. (eds.); Taguchi, S. et. al.	４．発行年 2018年
２．出版社 Palgrave Macmillan	５．総ページ数 292
３．書名 The Realizations of the Self	

１．著者名 岡田聡、野内聡　編、田口茂他著	４．発行年 2018年
２．出版社 月曜社	５．総ページ数 299
３．書名 交域する哲学	

１．著者名 池田喬・合田正人・志野好伸・田口茂・ほか15名	４．発行年 2018年
２．出版社 明治大学〈現象学の異境的展開〉プロジェクト	５．総ページ数 442
３．書名 異境の現象学――〈現象学の異境的展開〉の軌跡2015-2017	

１．著者名 Roberto Walton, Shigeru Taguchi, Roberto Rubio	４．発行年 2017年
２．出版社 Springer	５．総ページ数 202
３．書名 Perception, Affectivity, and Volition in Husserl’s Phenomenology	

１．著者名 Ching-yuen Cheung, Wing-keung Lam, Shigeru Taguchi, ほか14名	４．発行年 2017年
２．出版社 V&R Unipress	５．総ページ数 285
３．書名 Globalizing Japanese Philosophy as an Academic Discipline	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	西郷　甲矢人 (Saigo Hayato)		
研究協力者	吉田　正俊 (Yoshida Masatoshi)		
研究協力者	フロース　トム (Froese Tom)		
研究協力者	土谷　尚嗣 (Tsuchiya Naotsugu)		
研究協力者	金井　良太 (Kanai Ryota)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	ド・ウォレン　ニコラス (de Warren Nicolas)		
研究協力者	アルトブランド　アンドレア (Altobrando Andrea)		
研究協力者	野口　渉 (Noguchi Wataru)		
研究協力者	飯塚　博幸 (Iizuka Hiroyuki)		
研究協力者	大塚　淳 (Otsuka Jun)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計5件

国際研究集会 Structures of Consciousness	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 Tom Froese 博士（メキシコ国立自治大学）講演会	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 Self: Between Consciousness and Non-being	開催年 2017年～2017年
国際研究集会 What is Phenomenology?　Ideas from East Asia	開催年 2017年～2017年
国際研究集会 Mind-body problem - Do we need to replace it by the world-brain problem?	開催年 2017年～2017年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
メキシコ	メキシコ国立自治大学			
オーストラリア	モナシュ大学	クイーンズランド工科大学		
イタリア	パドヴァ大学			
米国	ペンシルベニア州立大学	カリフォルニア工科大学		
中国	中山大学	同済大学	中国政法大学	
イタリア	パドヴァ大学			
カナダ	オタワ大学			
アルゼンチン	Universidad de Buenos Aires			
チリ	Universidad Alberto Hurtado			